


 書評

内海 健 著

# 自閉症スペクトラムの精神病理

星をつぐ人たちのために

神尾陽子

本書は成人自閉症スペクトラム障害 (ASD), それも高い言語能力を持つ患者,あるいは ASD と診断されるほど極端ではないが強い ASD 特性を持つ成人患者 (関下 ASD) を対象としている。発達障害への感度が上がった今なお,言語を流ちょうに話す ASD (関下 ASD も) の人々は幼児期に「発達の遅れ」という分かりやすい要素がないがために,周囲に理解されない長い孤独の時間を過ごし,社会に居場所を求めて苦闘している。そして精神科臨床にはこうした成人 ASD が一定の割合で潜在する。診療時間を十分に取れない精神科医にとって,通常の医師—患者関係を築きにくいこうした一群の患者の深刻なニーズはわかるものの,どのように彼らの訴えを理解し,対応するのがよいかはすぐにでも知りたいところであるだけに, ASD の精神内界に迫る本書はその先鞭を付けた待望の一冊と言える。精神病理学者として多数の名著を世に送ってきた著者の手になる初の ASD 論である本書は,精神病理学をベースとしているが精神病理学だけに閉じられていない点ですべての読者にとって読みやすくかつ刺激的な内容となっている。発達障害に苦手な印象を抱いている精神科臨床医には開眼の衝撃を与え,また発達障害の知識を持つ読者には自らの臨床経験に立ってその前提を批判的に検討することを促すに違いない。

第1章で取り上げられたのは,「定説化」している自閉症の「心の理論」仮説である。この心理学的仮説は1980年代に脚光を浴びたのち主役の座から降りたものの今なお ASD の脳画像研究などでは前提とされることが少なくないが,著者はこれを正面から批判的に検証し,自閉症仮説以前に,そもそも人が他者を理解する際の仮説として間違っている,と一蹴する。まず自己ありきという「心の理論」仮

説に対して,他者からの志向性に対して立ち上がってこない自己を ASD の問題の本質と捉え,既成の発達心理学の発達論や自閉症の症候論を広く展望した上で他者に対する了解,という観点から論を展開する。そして ASD 者は発達過程のいずれかの時点で自己にめざめるが,そのめざめこそが成人 ASD 者の固有の問題を形作る,とする。このような議論は,著者の視線が ASD 者,定型発達者双方に向けられ,これまで見る側であった定型発達のありようを容赦なく問い直し相対化した結果,生まれたものである。成人 ASD 者のエビデンスのピースをつなぎ合わせることができないでいた評者の立場からは,文献を展望した上でご自身の豊富な臨床経験を素材として内海先生ならではの論考を加えてこうした精神病理学的臨床論を提示してくださったことに心から感謝したい。女性 ASD のアンメット・ニーズの奥底に光を当てたという点も,本書の試みは新しい。これを機に精神医学において ASD,そして発達障害をめぐる架橋的な治療論が活発となることを期待する。

本書の利点として「はじめに」に次のような文章がさりげなく書かれている。「適応が改善していくということである。小さな工夫の積み重ねが,意外なほど役に立つ。その前提となるのが,彼ら彼女たちの精神世界を理解することである」(p2)。このくだりこそが本書の価値を一番表しているかもしれない。

(国立精神・神経医療研究センター児童・思春期精神保健研究部部長)

●A5 304頁 2015年11月 定価:本体3,500円+税 医学書院刊